拾遺和歌集
人

六月三日羽黒山より出る圖司だ吉と云者を引て別当
代金剛坊に開利を渡て南谷のお院を今して懺悔
の修こうやうを立きゝ

有難や雪をかをるゝ南谷　雪旅人防誹諧異り

五日權現を詣當山開闢能除大師ハいつもの代参人と
云ゝをきゝて延喜式に羽州里山の神社と書寫黒
の字を里山とかきるゝは羽州黒山を平略して羽黒山
とゝなるや出羽ゝいつも鳥の毛羽を出國の貢に献ぜ
風土記に伝ゝやうに月山湯殿を合て三山と云當寺武

李防御

江東叡山に屬して天台止觀の月明らかに圓頓融通の法の
灯をかゝげ給ひて僧坊堂塔をかまへ給ひ修驗行法を勵し給ふ山
靈地の験効人貴且恐るべし然ふ策長ずして世を捨給ひ
遁世へ
八日月山の行る本坊をあゆみ出給ふ寶冠に肩と色
強力ともなひ給ひて雲霧山気の中に紛雲を踏
てのぼる八里夏の日月行ゆく雲関に入るにのや
まれ息絶たるこゝ頂上に臻れて日没て月昇る華
を補篠を枕として臥て明るを待日出て雲消れて
湯殿に下る
谷の傍に鍛冶小屋ありこゝ出羽國の鍛冶霊水を撰て寶
剣潔斎して劔を打ぬ月山と銘を切て世に賞せられ
彼龍泉に劣を淬ゝ干將莫耶のむかしを尋ぬ
道に堪能の徒あさからぬ事とこれを崇め給ふ
たゝ中なる所にて三尺ばかりなる槽のつくり水ひか
るあり姫の様雪の下に埋て春を忘れぬ生さまの
多の心もとなし実に梅花の咲るかのごとくにして
僧正の歌の哀も実なるかなと思ひ出て此

月山

山中の微細の者の法式として他言せざる事を梅ふきて仍て筆をとゞめて記さん坊より湯殿山の事に依て三山順礼の白く短冊に書

涼しさやわれのこゝの月の羽黒山
雲の峯幾つ崩れて月の山
語られぬ湯殿に濡るゝ袖の露
湯殿山銭ふむ音の涙こゝ　曾良

羽黒をこゝ鶴の岡の城下も山氏重行といふ物の妻の家よむとゝれて誹諧一巻有た吉先よりとゝめ川あり

て酒田の湊よりゝる渕尾不玉といふ醫師の許を宿とす

ひの川と山や吹浦にうつて　夕すゝみ

暑き日を海よ山まつゝ　象潟

江山水陸の風光数を尽して今象潟に方寸を責酒田の湊より東北の方山を越磯を伝ひいさゝを踏みて其際十里日和もかゝらぬ波風なを砂を敷て雨朦朧ゝ

て象潟の山うゝる闇夜に莫作て雨もまた奇也とゝは雨後の晴色又格別なりと蜑の苫屋に膳をいそぐ雨の晴を待て船を浮べ天能霽て朝日はさやかに出る程象潟

嘉門秀白

[illegible]
[illegible]
[illegible]
神功后宮の御墓とぞ[illegible]干満珠[illegible]
[illegible]
て[illegible]風景一眼の中[illegible]南[illegible]海天[illegible]
[illegible]江[illegible]西[illegible]の関路[illegible]東
[illegible]海北[illegible]江[illegible]入
[illegible]江の後模一里[illegible]伊松[illegible]

又異なり松[illegible]の如く象潟[illegible]
[illegible]地勢魂[illegible]

象潟や雨[illegible]西施[illegible]
汐[illegible]中[illegible]海[illegible]

祭礼

象潟や料理何くふ神祭　芭蕉
雲の象中戸板を[illegible]夕　源[illegible]国の高人低耳
岩上に雎鳩の巣をみる
波こゝぬ[illegible]あり[illegible]やみさこの巣　芭蕉

花女糸宮

酒田の舟渡りを越て北陸道の雲をしたふ道のはひ
猶をいとまもなく加賀の府まで百世里とかや嵐の関を
こゆれば津幾の地より歩みを改て能登の国一宮の気
到る所九日暑湿の気に神をなやまし病おこりて事
をしるさず

文月や六日も常の夢よりは仙をも
荒海や佐渡によこたふ天河
今日は歌しるしなどとて大かたの句なしなど北国一
の難所を越てつれづれはたびねにとなく寐るに一向隔
て面の方よりきぬぎぬの声に二人寐ざめて
これ幸なる事ども物がたりをきけば越後の国新潟といふ
所の遊女なり伊勢参宮をこころざして此関までかの道
ずれにはたびなれぬよしにて文をたのみ侍るの
ちなる白浜のよしなる所をたづねて
の世をあさましうかりける宿なれば
うてつれの侍らをとこ
こゆるとなりて此新潟の遊女
ぬぎすてし衣をとりあつめ

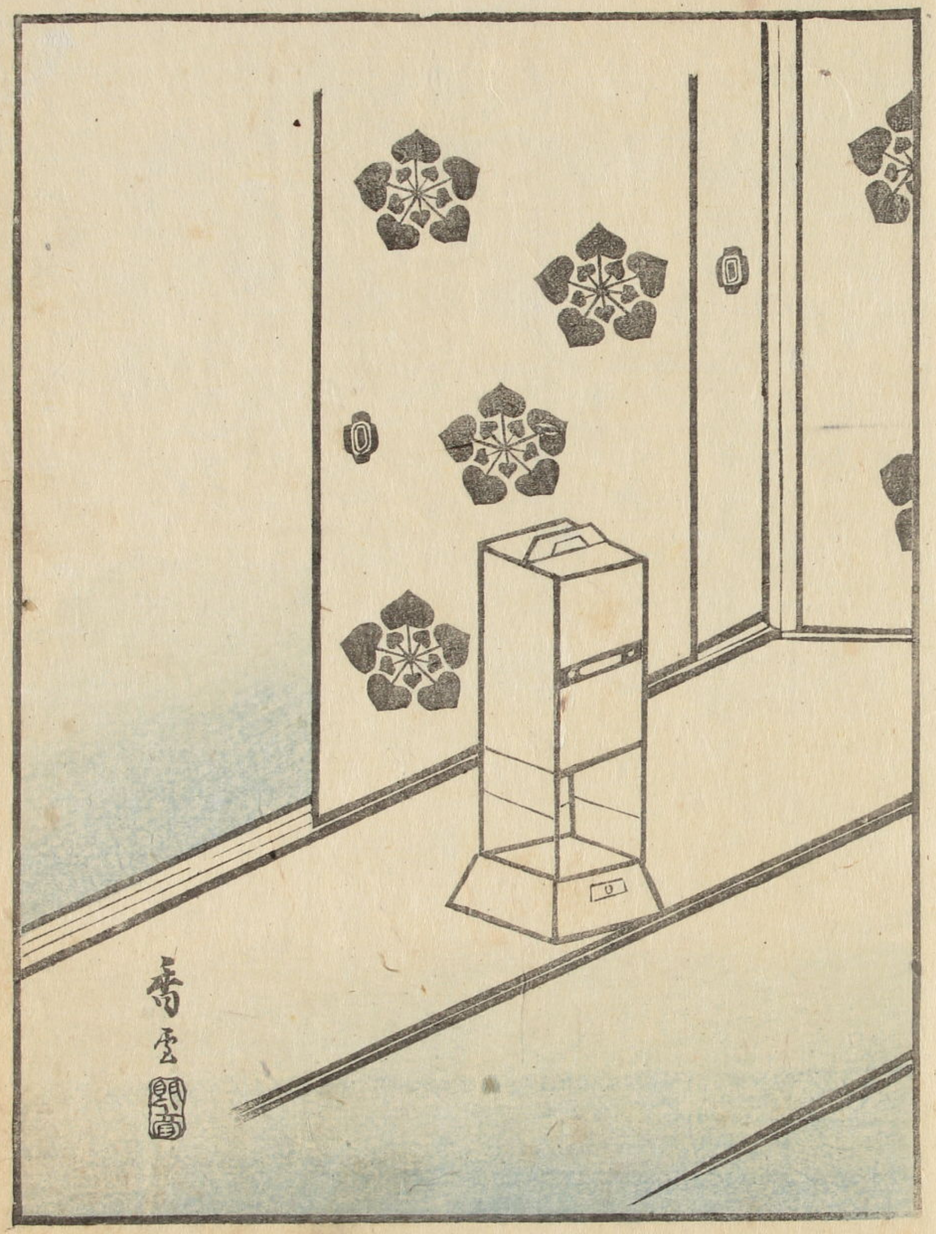
の情よ大義のめくみをこうむれて結縁なきものと思を
為て夜のうちハ伏れども夢ハ覚ぬ方
なり只人のいまのもとりへ神明の加護なる
義なるべしとて拾て出つ義きたりてやまさかえ
一家ゝ拾遺 如月 月
曽良よりこれハ書とめ侍るくろへ日十八の歌とや教ち
らぬ川をわたりて那古の浦より出 檐籠の義流ハ春な
ほてども初秋の気と為へきあと人よ乗れハそより五里
いろ侍ひて出ての山陰よりの巡の若きくるるれハ

蕉の一巻の発句ものあるるをいひをとされてこのろ
国ゝ入

させの香や分入右の方 曽徳海

あのふ山とりつゝ谷をとて金沢ハ七月中の五日
ちか宮よ大坂よりの商人何處ゝ者をとれの拾扁を
とりもてて
一筆とゝのハ洪石よりとるあのかのゝ世ゝ知
人ゝ侍ゝよ古ゝの冬ゝ無世ゝとゝ其兄迷善を
侍ゝ

曾良金昌さま
宿る


秀雲

塚も動け我泣声は秋の風

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

途中唫

あかあかと日は難面もあきの風

小松と云所にて

しほらしき名や小松吹萩すゝき

此所太田の神社に詣。実盛が甲錦の切あり。往昔源氏に属せし時義朝公より給はらせ給とかや。げにも平士のものにあらず。目庇より吹返しまで菊から草のほりもの金をちりばめ龍頭に鍬形打たり。実盛討死の後木曽義仲願状にそへて此社にこめられ侍よし樋口の次郎が使せし事共まのあたり縁起にみえたり

むざんやな甲の下のきりぎりす

山中の温泉に行ほど白根の嶽跡にみなしてあゆむ。左の山際に観音堂あり。花山の法皇三十三所の巡礼とげさせ給ひて後大慈大悲の像を安置し給ひて那谷と名付給ふや那智谷組の二字をわかち侍し

等載
翁を
仲哀天皇の
廟へ
とまる

とて堂のまへに古松植ゑられ堂宮きの小堂完の上
に生ひそだちて子孫の土地と
石山の石のうへにしく秋の風
温泉の落葉其功有明に消ると云
山中や菊なぶるまぬ湯の白
ひとりとまる翁八久米を助とていまだ小童なれば父
謙譲を好み洛の貞室に学ぶ貞室の門人となり
風雅を尊しめられて洛に貞徒の門人となり
世にしられる功名の後は一村判詞の料を請ると云今更
むの語とはなるぬ
曾良八腹を病て伊勢の国に病よりあれハ
先立て行
りて行れ仏となる秋の哀　芭蕉
とゝまる事うりかの世に残るものとゝまり隻鳧の行
もとゝ雲とまるまつるこゝろ又
今日よりや書付消さん笠の銘
大聖持の城外金昌寺とゝまりとゝまる牧加賀の地と
なるとしるおの表はるゝ浦く

文山

終宵　秋風聞やうらの山

と残す一夜の隔千里に同し吾も秋風を聞て衆寮に臥は明ほのゝ空近う読経声すむまゝに鐘板鳴て食堂に入けふは越前の国へと心早卒にして堂下に下るを若き僧とも紙硯をかゝえ階のもとまて追来る折節庭中の柳散れは

庭掃て出はや寺に散柳

とりあへぬさまして草鞋なから書捨つ越前の境吉崎の入江を舟に棹して汐越の松を尋ぬ

終宵嵐に波をはこはせて
月をたれたる汐越の松　西行

此一首にて数景尽たりもし一辧を加るものは無用の指を立るかことし

丸岡天龍寺の長老古き因あれは尋ぬ又金沢の北枝といふものかりそめに見送りて此処まてしたひ来る所々の風景過さす思ひつゝけて折節あはれなる作意を聞ゆ今既別に望みて

物書て扇引さく余波哉

五十丁ばかり入て永平寺と云て道元禅師の住寺也邦
機の里を過て[illegible]山陰を伝ひて[illegible]
つ有と云
福井八三里計なれハ夕飯をすませて出る人きうれの道
[illegible]山を[illegible]の[illegible]
江戸[illegible]十とを隔りて[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
家多く[illegible]

うつ[illegible]ハ[illegible]門を扣て俗一家なる女の出て
いつよりの[illegible]心の[illegible]
[illegible]
の書[illegible]
[illegible]
名月[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]を[illegible]ハ極の城[illegible]
のなれつゝの津〻宿をとゝむ[illegible]
あるの[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]の明神[illegible]
の末[illegible]月の[illegible]
[illegible]往昔[illegible]二世の上人大[illegible]
[illegible]の土[illegible]
の[illegible]

[illegible]れと[illegible]
月清〻遊[illegible]
十四日[illegible]

石月やゝ小國日和宮[illegible]

十六日[illegible]
[illegible]海上七里あり天[illegible]
[illegible]
風[illegible]
[illegible]寺あり[illegible]茶を飲[illegible]

のさひしさ哀れ場所

寂しさや須磨にうつる月の秋

浪の音や小貝ふまして

其日のひるより等栽と筆をとりてちるおもて露

通りはみちまでもむかひてこの国へ使ひ詣り

きたりて大垣の庄に入て曾良も伊勢より来り合

越人もとどこをて如行の家に集る前川子前口

父子其外たづね人々日夜とりて蘇生のよし

よろこびつつ且悦且いとる旅の物うさもいまるやま

さかるを九月六日つるがの明神の遷宮おこなはるゝを見て

のぼるなり

蛤の

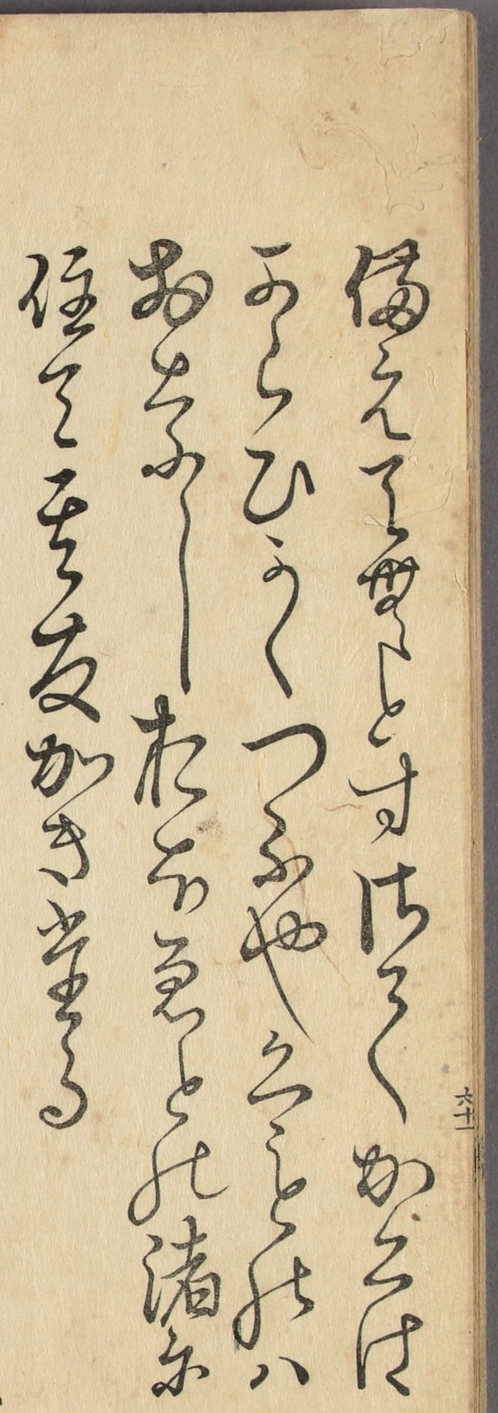
ふたみへ

ゆくあきぞ

和歌所は只古き
うたを用ひて
古風を後世に
留めんがため
なり
むかしもかくの如
しよりて
社

う[illegible]ゆ[illegible]
[illegible]り松[illegible]乃[illegible]
[illegible]
晴[illegible]
あ[illegible]
[illegible]
隈[illegible]
[illegible]
[illegible]

加[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]



文政五壬午冬十二月

東都書林　野田七兵衛

京都書林　野田治兵衛
浦井徳右ヱ門

彫工　黒川友三郎